

74

エストニア語

ESTONIAN

【主な使用地域】 エストニア共和国のほぼ全域で話されるが、東北部のナルヴァ市を中心とする地域では、ロシア語が優勢で、エストニア語の話者は少数派になっている。エストニア国内での話者数は、約92万人(2000年の国勢調査)。



どんな言語?

ウラル系の言語で、フィンランド語の姉妹語と言われます。確かに似ている点は少なくないのですが、文の構造や語彙の点では大きな隔たりがあり、それぞれの言語の母語話者が初めて聞いてすぐ相互理解ができるほど近い関係にはありません。

エストニア語では、強勢のある音節(普通は第1音節)の母音と、強勢のある音節の末尾にある子音について、短・長・超長の3段階の長さの区別が見られる現象があり、この言語の特徴としてよく話題にされます。ただし、標準語の正書法には、母音間の閉鎖音(p,t,k)を除いて、長音と超長音を区別しない(どちらも文字2つで表記されてしまう)という欠点があり、エストニア語を外国語として学ぶ者にとっては言うに及ばず、エストニア人の中にさえ、標準語における長音と超長音の使い分けを身につけるために学校で苦労する人が少なからずいます。そのため、日本語に「標準語アクセント辞典」があるように、エストニア語にも、長音と超長音の使い分けを明示した「正用法辞典」が出ています。

正用法辞典では、綴り上、長音と超長音が同じに綴られるときには、実際の正書法では使われない鈍アクセント記号(˘)を超長音の前に添えて区別するのが約束になっています。母音や子音の長さだけで意味が区別される例をあげると、koli「がらくた、くず」—kooli「学校の(k˘ool「学校」の属格形)”—k˘ooli「学校へ(k˘ool「学校」の入格形)」、lina「シー

ツ) —linna「町の(li˘nn「町」の属格形) —li˘nna「町へ(li˘nn「町」の入格形)」。ただし、閉鎖音には有声と無声の対立がないため、例外的に母音間の閉鎖音だけは、有声子音を表す文字を短音、無声子音を表す文字を長音の表記にを使って、短音・長音・超長音を b/d/g—p/t/k—pp/tt/kk のように書き分けています。たとえば、taba「つかめ(2人称単数命令形) —tapa「殺せ(2人称単数命令形) —ta˘ppa「殺す(不定詞形)」。

名詞が14の格に活用することも、エストニア語のきわだった特徴の1つです。残念ながら詳しく紹介できませんが、場所関係を表す格形の使い分け1つとっても、日本語ではわざわざ表現し分けられないものがあったりするので、学習者にとって格の使い分けを習得するのは厄介です。

●使ってみようこんな表現!

Tere! 「こんにちは; やあ」 Tere hommikust! 「おはよう」
 Tere õhtust! 「こんばんは」 Head aega! 「さようなら; ごきげんよう」
 Head õhtut! 「さようなら(夕方別れるとき。「よい晩を」の意)」
 Head õöd! 「おやすみなさい(「よい夜を)」 Terviseks! 「乾杯!」
 Jah! 「はい(そうです)」 / Ei! 「いいえ」
 Palun! —Aitäh! —Palun! 「どうぞ」—「ありがとう」—「どういたしまして」
 Vabandust! 「ごめんなさい; 失礼ですが」
 Kuidas? 「えっ、なんとおっしゃいましたか?」

エストニア語の今

エストニアは、日本の1つの県(沖縄・岩手の人口が約140万人)に相当する人口(134万人、2008年)で、住民の3人に1人がエストニア語以外の言語(たいていはロシア語)を母語としています。全国津々浦々まで日本語が通じるのがあたりまえと考えている平均的な日本人にとって、エストニア人の言語生活を思い描くのはかなりむずかしいと思います。

エストニア人の祖先がこの地に住み始めたのは、今から4千年以上も前のことなのですが、エストニアが歴史に本格的に登場する13世紀初め頃からの歴史を大ざっぱにみても、4つの戦争とソ連邦崩壊(1991)を区切りとする、6つの時期に大きく区分することができます。

- (1) ドイツ騎士団領時代(リボニア戦争(1558-83)まで; 約250年)
- (2) スウェーデン領時代(北方戦争(1700-21)まで; 約150年)

- (3) ロシア帝国領時代(第一次世界大戦(1914-18)まで; 約 200 年)
- (4) 独立(第一共和国)時代(第二次世界大戦まで; 1918-1940; 約 20 年)
- (5) ソ連時代(ソ連邦崩壊まで; 1940-1991; 約 50 年)
- (6) 独立国として再出発(1991-現在)

この波瀾万丈の歴史の中でエストニア人は、ほとんどいつも弱い側として他民族と接してきました。もっとも深く関わったのはゲルマン系のドイツ人やスウェーデン人、スラブ系のロシア人ですが、このことは当然ながら、エストニア語の文法や語彙に大きな影響を残しています。

文の構造、とくに語順にはドイツ語の影響と思われる現象、たとえば、述語動詞が文の2番目の要素になる傾向、文頭に主語以外の要素が現れる場合、動詞が主語に先行する語順など、とくに書きことばではっきりと見られます。ソビエト時代には、ロシア語の影響と思われる構文や慣用句が頻繁に使われました。定着したものもありますが、違和感のあるものは、今では「ソビエト風表現」(sovetism)として避けられています。ソビエト時代に編纂が始まり、第1分冊が1988年に出てから20年、2007年末に第26分冊でようやく完結した、エストニア語初の国語辞典『エストニア語詳解辞典』(*Eesti keele seletussõnaraamat*)の編集主幹の話では、この辞書の最初の部分は「ソビエト風表現」が多すぎるため、すでに改訂版の準備が進んでいるそうです。

☐ お奨めの本 手前味噌ですが、日本語で書かれた文法としては、次のサイトからダウンロードできるPDF版の『エストニア語文法』が唯一のものようです。http://www.kmatsum.info/eesti/opik_pdf/index.html
この文法書は、詳しく書かれてはいますが、もともと集中講座用に準備された教材なので、独学用には向いていないかも知れません。英語では、2枚のCD付きの入門書が出ています。

Mare Kitsnik and Leelo Kingisepp. *Teach Yourself Estonian Complete Course*. McGraw-Hill, 2008.

辞書と呼ぶにはほど遠いですが、日本語との対訳になった語彙集がエストニアから出ています。見出し語語数はどちらも5000語程度です。

Jaapani-eesti sõnastik. Tallinn: Kirjastus Ilo, 2004

Eesti-jaapani sõnastik. Tallinn: Kirjastus Ilo, 2006

エストニア語を話す人々

いまでこそエストニアは出入国も簡単で、国内を自由に観光できますが、ソビエト連邦が崩壊して独立を回復する1991年以前は、旅行前のビザ申請が必要で、原則として首都タリン市での滞在以外認められませんでした。ソビエト時代のタリンは、エストニア語系とロシア語系の住民の比率が半々くらいでしたが、公共の場所で使われる言語は圧倒的にロシア語。タクシーの運転手もデパートの店員もロシア語をまず使い、たとえばデパートで、客と店員がお互いに相手がエストニア人と知りつつ、ロシア語でやりとりをするという場面もよくあったようです。私が初めてエストニアを訪れた1978年12月当時は、外国人は一般のエストニア人と自由に交流できず、科学アカデミーの職員(秘密警察派遣職員?)のお膳立てで初めて、日本語を勉強しているというエストニア人たちと会うことができました。

独立回復から20年近く経ち、タリンの言語状況はすっかり変わりました。ロシア語系の住民の割合は大して変わっていないはずなのに、市内のたいの公共の場所でエストニア語が第一言語となり、エストニア語に堪能なロシア語系の若者たちも増えています。町の中心部にできたエストニア最大のショッピングセンターの地下にあるスーパーに行くと、お総菜の量り売りカウンターで、客が買いたい商品をロシア語で言い、店員もロシア語で対応していたと思ったら、最後の値段だけエストニア語で伝え、お客も値段がわかってしまったというような風景も最近は見えます。

2005年のEU加盟以来、エストニア人は自由にフィンランドで仕事ができるようになりましたが、平日フィンランドで働いて週末はフェリーで帰る、いわゆる「シャトル労働者」が増えているそうです。ヘルシンキやその近郊の建設業や清掃業は、業界によれば13000人、ヘルシンキ市の発表では7000人というシャトル労働者に依存していると言われています。



首都タリンは別名「塔の街」とも呼ばれる。中世の面影を残す旧市部は世界遺産。